

2026年8月14日（金）

老球の細道935号

講習会（クリニック）での「デモンストレーション」

会津バスケットボール協会 室井 富 仁

今は昔、バスケットボールの指導者講習会や教員の研修会などに参加すると、決まって会場の席は後ろの方から埋まっていく。しかし、例外もあった。かつて参加した旧日本体育協会公認上級コーチ（日本バスケット協会 A 級コーチ）講習会。色々な種目の日本代表コーチが参加しており、それぞれのモチベーションはすさまじく、講習会の会場の席は前列から埋まり、少しでも遅れると後ろの席でも座るところがない状態であった。このことから、私は前の席から埋まらないような講習会は、そこに参加する人のモチベーションが低い講習会であることを認識した（前列は講師から指名されるのではないかという恐怖）。

選手を対象にした実技講習会、クリニックなども同様である。意欲のない子どもたちは、集合すると常に後ろの方の位置で講師の説明を聞き、ドリルを始める時も誰かの後から始めるのが常である。現在 B リーグ北海道のヘッドコーチで指揮を執るトステイン・ロイブル氏は15年にわたって会津でクリニックを開催した。その時に私がコーチをした会津高校、坂下高校、葵高校においては、講習会を受講する態度を毎回口うるさく指導した。

今覚えているのは次のようなことである。講師に元気よく挨拶をすること、講師が話をする時は講師の鼻毛が見えるくらい前に出て聞くこと、練習が開始される時は一番早く取り組むこと、そして講師がデモンストレーターを指示した時は一番早く前に出ること。上手くできる、出来ないは関係ない。以上のことを二日間の講習会で徹底してやり続けると、その二日間でチームも個人も見違えるように上達したものである。

講習会に自ら参加してくる選手は、基本的に皆上達を望んでいる。しかし、ただ望んでいる選手と本気になって望んでいる選手とでは取り組む態度が違う。前者は絶対にデモンストレーションには出ない、他人より先に練習を始めようとはしない。自信がないから、もし失敗したら恥ずかしいという気持ちが上達の意欲に自らブレーキをかける。後者は自信がなくとも、恥ずかしさより上達して勝ちたいという気持ちの方が優先されるから、デモンストレーションが指示されたら、できなくとも前に出て行き、恥をかき、講師からいじられる。ドリルが開始されると常に一番乗りでプレイする。そのような姿勢が講師の眼につき、人一倍講師から声をかけられ、練習量も人一倍増える。上手くならないはずがない。先月サッカーWCで活躍したノルウェーのハーランド選手のジュニア時代の「存在感」とはこのような姿勢だったのではなかろうか。

選手が大ブレイクするきっかけは簡単である。「汗をかく（努力すること）」、そして「恥をかく（失敗して皆から笑われること）」。さらに「出る杭になる」「出過ぎた杭になる」ことである。これさえ克服すれば怖いものはない。体力も技術もいらないコミュニケーション（声を出す）や「練習ドリルで一番先に並ぶ」（チームのエースの姿）ことができるようになる。後はバスケットボールの神様がその選手を勝手に名選手にしてくれる。